

ア  
ス  
ノ  
ア  
リ  
カ

藤  
田  
ヒ  
ロ  
シ

世界は「戦争」の中にあつた。食料・エネルギーの枯渇がもたらしたこの争いは、もう5年も続き、全世界の総人口は開戦前の約70%に減少していた。そして、その人口の減少という結果が「人口と資源の適正なバランス」を生み出すことになった。

それまでの多くの戦争のように、この戦争もその「理由」とは別の「遺恨」を生み出すことにはなつたが、それよりも「人類滅亡」「地球滅亡」の危機感が、ようやく、「書物の中」ではなく、「目の前の危機」として受け止められ、「人口と資源の適正なバランス」をもって結果をもつて、終戦を迎えることになった。

その日、この国、この町は・・・いや、世界は「静かな朝」を久しぶりに迎えていた。

舞台は古びたカフェ。一つのテーブルと3つのイス、それぞれに玲菜、珠樹そして綾女が座っている姿が浮かぶ。3人は部屋に住みに置かれた終戦を告げるテレビを眺めている。

玲菜 「どれくらい振りなのだろう・・・随分と遠い記憶を呼び起こさないといけない。まるで『初めて』と思うような、とてもとても静かな朝だった。」

壊れかけのモニタのちらつく光りに、三人の希望とも絶望とも取れない表情が浮かびあがる。きっと、アナウンサーはこの終戦をセンサーシヨナルな事として、興奮を抑えながらも決してそれを隠し切れずに伝えているだろうが、三人の耳にはとても遠い音としてしか届いていない。

突然、テレビが切れる。しかし、慌てることのない三人。しばらくして、珠樹がテレビに近づき、どうにかしようとするが、復旧はしない。

綾女 珠樹。もう寿命だよ。

珠樹 まだ大丈夫ですよ。きっと、直せますって。

綾女 だとしても、いいの。

珠樹 ……？

綾女 悲しい・・・虚しいニュースはもうお終わり。やっと訪れた静かな朝・・・だから、もう騒音はいらない・・・でしょ？

そういつて古びたカウンターの奥に消えてゆく綾女。しばらく消えた  
テレビを眺めている珠樹。

「何も無い時間」が流れる。

珠樹 こうなってみると・・・終わっていつも突然。

玲菜 私達には何も出来ないからね。出来たかもしれないけど・・・してこなかった。いつも受身。問題や危険を見ない振りしてきて結果だけを騒ぐ。突然なんてありえないけど、突然と感ずる・・・そういうことじゃない？

珠樹 見ない振りじゃない・・・見る事が出来なかった。知ることが出来なかったんだよ。

玲菜 珠樹、本当に、そう思う？

珠樹 思いも何も・・・そうだったじゃない。

玲菜 本当に？

珠樹 ・・・・何が言いたいの？ 玲菜さん。

玲菜 別に・・・ちよつと、からかってみただけ。

綾女 あった！「見ない振り」なのか「見れなかった」のか・・・どっちにしても「見てなかった」ってことでしょ？ 珠樹も玲菜も私も・・・この街の人も・・・世界の人も・・・気付きのチャンスはいくらでもあったはず・・・後になつて思えば、そう思うのは驚くほどに簡単。大切なのは、見逃してきたことを繰り返さないこと・・・だけど、それも難しいんだね、きつと。

カウンターから綾女が出てくる。

綾女 でも、ちよつとは学習しないとね。

埃のかぶったワインをかざす綾女。驚く2人。

珠樹 中身入っているの？ 本物？

綾女 随分と寂れたけど、一応ここはC A F E ですからね。

玲菜 それじゃ、お金取る？

綾女 そんな気、ないでしょ？ 昔から。お祝いよ、これは。

珠樹 何に？

黙って、ワイングラスを3つ並べ、ワインを注ぐ綾女。

珠樹 この一杯で、どれだけのものが買えるのかな？

綾女 ワイン、一杯は、所詮一杯よ。

玲菜 闇市に持っていけば・・・どうだろう？・・・どれくらいかの手に入るかな？今からでも、持っていく？

綾女 ワイン、一杯は、所詮一杯・・・それ以上の価値はない。こうやって、3人が生き延びて、グラスを合せることが出来る価値以上ものはない・・・でしょう？

黙って、ワイングラスを手にする3人。

綾女 静かな朝に・・・。

珠樹 静かな朝に・・・。

玲菜 新しい朝に・・・。

グラスの重なる音が響く。

闇の中に浮かび上がる三つの影。静かな時間が流れる。

浮かび上がる珠樹の姿。

珠樹 「終わりついても突然・・・そう、本当に私には何もできなかった。なぜか・・・泣くことすら出来なかった。」

玲菜・珠樹は「いつものように」綾女のところに集まっていた。珠樹が手に手紙を握って立っている。

彼女がかざした手紙をみて、イスから立ち上がる綾女と玲菜。

玲菜 珠樹、大丈夫？

珠樹 ……もちろん。

綾女 ホント？

珠樹 やめてよ、二人とも。とつくに、覚悟はできていました。

イスに座る珠樹。

珠樹　でも、こんな紙一枚で・・・その方が哀しいね。

沈黙

珠樹　綾女、アイツの好きだったあの苦いコーヒーある・・・わけないか。

綾女　う・・・。

玲菜　今は一粒のダイヤより、一握りのお米の方が価値のある時代だからね。

珠樹　そうだね。あの日、アイツが戦地に行く前の日、一番奥の席に座ったアイツに当たり前のように出てきたコーヒーだったけど・・・奇跡みたいなものだったんだよね・・・綾女、あれどうやって手に入れたの？

綾女　たまたま、手に入ったの。

珠樹　たまたま？

綾女　なじみの業者が手に入れた時に、少し分けてもらったの。

珠樹　偶然か・・・アイツ、運がよかったんだね。

沈黙

綾女　あのコーヒーはないけど・・・何か入れるね。

そういつてカウンターに消えてゆく綾女。

玲菜　珠樹。彼と正式に籍を入れてあるの？

綾女　ううん。急だったから、式だけ上げて、形だけ整えた・・・正直、籍とかそういうの考えることなかった。まわりの言うことにただただ従って・・・昨日これ（手紙）が届いた時に、「そういえば」って気がついた・・・アイツはわかってこうしたのかな。

闇に浮かぶ珠樹の姿。（回想）

珠樹　心配しないで、この辺りは大丈夫よ。心配症ね。私のことより、自分の事・・・無理しないでね。ヒーローなんかにならなくなっただっていいんだから、「命をかけて」とか、そういうの和成さんには似合わないと思うから。だから、私は大丈夫。みんなもいるし、寂しくなんかないし・・・こう見えても、逃げ足だけは速いんだから。

沈黙

珠樹　いつまで続くのかな・・・始まった頃はみんな「すぐに終わる」なんて無責任なこと言っていたけど・・・泥沼っていうの・・・次第に世界のあちこちに飛び火して・・・男の人が戦地に連れて行かれる・・・。いいの。頑張らなくなっちゃいいの。和成さんが一人が何かしたって終わることじゃないでしょ？ 頑張らなくなっちゃいいの、誰も頑張らなくなっちゃいいんだから・・・テキトーでいいんだから・・・なんでこんな時代に生まれたんだろ。

綾女がコーヒーを運んでくる。

綾女　ここ、置いておくね。

すぐに姿を消す綾女。

珠樹　ごめんなさい・・・心配しちゃうよね。でも今日は許して・・・明日は笑顔で見送るから。

自分と玲菜のカップを持って、綾女が現れる。珠樹はテーブルのカップ

に視線を落としたまま動かない。

玲菜　（一口飲んだ後）・・・これ・・・コーヒー？

綾女　コーヒーもどきって感じかな。

玲菜　って、一体を飲ませたのよ？

綾女　心配しない。変なものじゃないから。コーヒーとは「ちよつと」違う木の実を使って・・・ちよこちよこつてね。色も香りも「ちよつと」しか変わらないし・・・「ほとんど」一緒って言ってもいい・・・かな。

玲菜　要するに「ニセモノ」ね。

綾女　今じゃ、「ホンモノ」と「ニセモノ」の境なんて曖昧。これだってそう。（一口飲んで）「コーヒー」って出せば、大抵の人は信じる。私が「あのコーヒーよ」って言えば、二人とも・・・多分ね。「ホンモノ」のコーヒーの味なんて、もう忘れてる。わからない。「これが、ホンモノ」って言われれば、そう思い込んでしまう・・・ううん、信じるしかないじゃない。

玲菜　・・・。

綾女　ホンモノかどうかなんて疑って、確かめようとするよりも、言われたままに思い込むほうが、楽・・・でしょ？

玲菜  
・・・。

珠樹がカップを手にして、口に運ぶ。

珠樹  
・・・ちよつと、苦味がたりないけど・・・私は、こっちの方が飲めるかな。

綾女  
そうでしょ？ 悪くないよね。

玲菜  
確かに、味はね・・・コーヒーのそれに似ている。でも、言いたい何？

綾女  
ヒミツ。

玲菜  
何で？

綾女  
またココを開こうかなあって思ってるの。これはその目玉。終戦宣言出たし・・・人は減たし、時間はかかるだろうけど、また活気が出てくる・・・はず。それに、いつまでも、ただ「待っている」生活をしていてもね・・・でしょ？

玲菜  
これを「コーヒー」って売るのは？

綾女  
流石にそれは危険かなって思っている。でも、正体は「企業秘密」ってやつね。「開発」までには色々苦労したのよ。

自慢げにカップをすする綾女。

綾女  
ううん。悪くない。

釣られるように飲む玲菜。

玲菜  
珠樹は売れると思う？

珠樹  
・・・。

玲菜  
珠樹？

カップを両手で抱え、そこに視線を落としている玲菜。

玲菜  
珠樹？

珠樹  
(独り言) 私・・・どうすれば・・・いいんだろう・・・。

玲菜  
何？

珠樹  
(独り言)「待っている」だけの暮らしに慣れてた・・・帰ってこないかもつて、思った事もあるのに・・・ただ何も考えずに「待っている」だけだった・・・。

玲菜  
・・・。

綾女  
大切な人を連れて行かれた人は、みんな同じだよ。ただ「待つこと」しかできないじゃない。「もしかしたら」って、それは不安になるし、アタマをよぎる・・・爆撃の映像が流れるたびに・・・どこかの家に「戦死通知」が届くたびに・・・でも、それでも信じて待つしかない・・・でしょ？

珠樹  
本当に、そう？ 綾女は本当にそう思っている。そう思って、待っているの？・・・でも、もう疲れたんでしょ？ だから、また店開くんでしょ？ 紛らわす為？ 忘れる為？ 逃げる為？

綾女  
待つ為。

珠樹  
！

綾女  
帰って来る場所・・・ココを守る為。ココで、待つ為。

珠樹  
そうか・・・そうなんだ・・・そうなんだよね。

綾女  
・・・珠樹？

珠樹  
綾女は違うんだよ。だた「待っている」だけじゃないんだよ。しっかりと「待っている」んだよ。愛する人の事を、愛されている者として、ちゃんと「待っている」んだよ・・・私とは違う。

綾女  
珠樹だって・・・

珠樹  
言われたままに思い込むほうが、楽・・・そう思ってた。

綾女の言葉をさへぎって発せられた珠樹のその強い言葉に、言葉を失う綾女と玲菜。

珠樹  
和成さんとは、小さい頃から仲良かった。お互いに一人っ子だし・・・お兄ちゃんと妹みたいだった・・・そう、そういう二人だったはずなの。好きだけど、でも、恋とか・・・そんなじゃなかったし、それは変わらないものだったはず。なのに・・・時代が変わって、私たちの間に望んでもいない変化を生んだ。『珠樹をお嫁さんにして思っている』・・・私は母さんからそう聞かされた。彼からじゃなくて、自分の母からね。きつと、彼には彼のお母さんが『和成の嫁に・・・』って言ったんだろうね。大人たちに空気は作られた。暗い時代・・・苦しい生活・・・その中で、珍しく周りが笑顔になつてた。私には選べないって感じた・・・考える力もなかった・・・言われたままの彼の「思い」を信じ込むほうが、楽・・・そう思ったの。

綾女  
・・・。

玲菜  
・・・。

珠樹  
でも、思い込めなかった。すっかり、思い込めなかったから、すっかり待っていてあげられなかった。彼の無事を祈ることはあっても、私の元に帰って来る彼を思うことはなかった。戦争が終わることを祈ることはあっても、その後の二人の暮らしを思うことはなかった。ただ「待つ女」って言うのは「こんな感じかな」って演じるみたいに・・・そう、暮らしてただけなんだよ・・・だって、泣けないんだよ。彼に召集がかかった時も、これが届いた時も、まわりは「大丈夫？」って声をかけるけど・・・私にはその意味がわからないくらいに、泣けないんだよ。悲しいとか、寂しいとか、辛いとか・・・そんな実感じゃなくて・・・私は『これはそういうことなんだろうな』って、だから『少しうつむいていないと』って・・・そんなこと考えていたんだよ。彼が・・・和成さんが、死んだのに・・・そんなこと考えているんだよ。

珠樹の肩が少し震え出す。綾女が何か声をかけようとするが、視線の合った玲菜がそれを制する。

珠樹  
私がすっかり思い込めれば泣けたのかな？ お母さんじゃなくて、彼から聞けたら泣けたのかな？ どうしたら、どうだったたら、胸が張り裂けそうなくらい・・・息が出来なくらい・・・苦しくて、悲しくて・・・子供の時に大声出して泣けたのかな？ 彼の為に一晩中涙を流してあげられたのかな？

震え始めた手で、カップを口に運ぶ珠樹。

珠樹  
大好きな、優しい「お兄ちゃん」のままだったら、泣けたのかな・・・。

沈黙

玲菜  
泣けなくなっちゃったよ。珠樹が今の気持ちを忘れないで、「優しいお兄ちゃん」の思い出を忘れないでいれば・・・それでいいんだよ。

肩の震えが激しくなる珠樹。少して、綾女がその肩をそっと抱き、イスに座るように促し、珠樹からカップを受け取る。

珠樹は、その手に持ったままになっていた手紙を両手で包み込むように握り、無言のまま上半身を前に倒して・・・それは泣いているように見える。

玲菜からもカップを受け取り、奥に消えてゆく綾女。

間に浮かび上げる玲菜の姿。(珠樹も奥に下がっている)

玲菜 「涙の価値って、何なのだろう？ それを流すと流さないかで何が変わるのだろうか？ 流せば情に厚くて、流さなければクールなのだろうか？ あの時、珠樹は涙では表すことの出来ない思いを抱えていた・・・私はいつから涙を流さなくなっただけなのか・・・」

綾女が奥から工具箱をもって現れる。

綾女 これしかないけど、大丈夫なか？

玲菜 見せて。

工具箱の中を物色する玲菜。

玲菜 これだけ？

綾女 無理？

玲菜 釘はちよつと小さいし・・・ノコギリもさびが来てるし・・・仕方ないか。贅沢はいえないな・・・。何とかするよ。

綾女 ありがとう！ 助かる！

自分の近くのイスに座って、その傾きを調べる玲菜。

玲菜 で、いつから再開するか決めたの？

綾女 早いに越した事はない・・・って思っているけど・・・店の中整理してから考えようかなって・・・。

玲菜 じゃあ、のんびりやっついていいわけね。

綾女 もちろん。だけど、なるべく早くね。

玲菜 はい、はい。

傾きを確認して、まずは鉛筆で印をつけ、それからヤスリをかける玲菜。削って、確認を繰り返す。

綾女は一度奥に戻り、ダンボールを持って戻ってくる。そして、そこからカップやグラスを出し、磨き始める。

綾女 玲菜。玲菜も一緒にやらない？

玲菜 私？接客業向きじゃないよ。

綾女 それはわかってる。

玲菜 なにそれ？

綾女 でもさ、なんかいいかなあって、3人で店やるもの。元々「品のいい店」だったわけじゃないし、こんな時代だし・・・楽しくやりたいなって。それに珠樹もそうだけど、玲菜も必要かなって。

玲菜 うれしい事、言ってくれるんだね。

綾女 どう？

玲菜 考えさせて・・・ココのメンテを終えるまでいい？

綾女 もちろん。よかった。即答で『やらない』って言われるかもって思ってたの。

玲菜 前ならそうしたかも。ココは好きだけど、それは遊びに来る場所としてだからね。でも、いろいろ・・・生きるとか死ぬとか・・・考えさせられて・・・大事にしたいじゃない、縁とか・・・そういうの。

軽く噴出す綾女。

玲菜 何？

綾女 ゴメン。玲菜にしては、ぼんやりした言い方だったから。

玲菜 そう？

何度目かの確認でイスに座る玲菜。

玲菜 綾女。

綾女 何？

玲菜 ……連絡、ないの？

綾女 誰から？

玲菜 少しは気をつかって聞いているんだから、誤魔化さない。

綾女 じゃ、もう少し気をつかって『聞かないで』・・・って、言ったら、もう聞かない？

玲菜 聞き方、変える位かな。

綾女 結局、聞かれるんだ。

玲菜 聞くよ。珠樹と違って、綾女は聞かないと、なーんも話さないからね。全部、抱えるから。

綾女 そんなことないよ。修理頼んだり・・・結構、まわりに投げちゃうよ。

玲菜 ……で、どうなの？

綾女 いい知らせも、悪い知らせも、ない。半年前にハガキが一枚届いただけ。

玲菜 ほら、聞いてないよ、半年も連絡ないなんて。

綾女 聞かれなかったから。

玲菜 それじゃ聞くけど、彼の配属先は本当に後方部隊？

綾女 こんな店でも、料理作っていたからね。『腕を買われた』って。

玲菜 それ信じている？

綾女 ……。

玲菜 信じ込もうとしてる？

綾女 ……きついな、玲菜は。

しばしの沈黙を、奥からの声が崩す。

珠樹 綾女え。これでいいのかなあ……。

ダンボールを持って、珠樹が現れる。

綾女 違う。

珠樹 えっ？

綾女 ダンボールに入れてない。

珠樹 それ先に言ってよお。

綾女 今、思い出した。

珠樹 絶対嘘だ。絶対いびりだ。「新人いびり」だ。

そっぞっぞっついながら、戻ろうとする珠樹。

綾女 あつ、それはそれで、置いておいて。

珠樹 ……はあい。『店長』

珠樹、ダンボールを近くのイスの上において、再び奥へ。

玲菜 何、探させてるの？

綾女 ワイングラス。半分くらいは食料に化けたけど、まだあるはずなんだ。この前は、テキトーなグラスで飲んじゃったけどね。

玲菜 あったところで、ワインないでしょ？

綾女 気分よ。飾っておくだけでも、少しは華やぐ……でしょ？

玲菜 そういうものか。

綾女 そういうもの。

それぞれの作業に集中する綾女と玲菜。しばしの静寂。

綾女 信じてないよ。信じたいと、思ったけどね。

玲菜 ……。

綾女 間違いなく、前線に配属されてる……あの人、料理上手くないし。

玲菜 確かに。

綾女 やつぱり、そう思ってたんだ。

玲菜 味より、食事できることが大事だから。

綾女 そうね。

玲菜 前線配置の部隊は……。

綾女 「大きな打撃」

玲菜 全部わかっついていて、それでも自分の事より珠樹の事？

綾女 自分の事考えたら、おかしくなりそうだから。

玲菜 ……。

綾女 ……私も、しっかり「待っている」わけじゃないね。

それぞれの作業に集中する綾女と玲菜。しばしの静寂……を奥から

の音が崩す。

珠樹 綾女え。これえ？

今度は藤の箱を持って、珠樹が現れる。

綾女 それ！それ！それ！何処にあった？

珠樹 綾女が言った棚とはまったく違う床下の貯蔵庫の中ですけど。

綾女 そうだ！上より下の方が安全だと思つて、半分処分した後で動かしたんだ。そう、そう、思い出した。

と、箱を受け取る綾女。

珠樹 いびり？これも、いびり？

綾女 教育。

珠樹 理不尽はいつの時代もあるんだね……。

幾度目かの確認をしていた玲菜。

玲菜 よし。珠樹、ちよつと座つてみ。

言われるままにする珠樹。

珠樹 おお、直つてる。流石は玲菜さん。……こういうのつて亀の甲より……。

玲菜 言わない。

珠樹 冗談ですよ。綾女、聞きました？

綾女 うん。

玲菜 それで？

綾女 考えるつて。

珠樹 へえ、即答で「やらない」じゃなかったんですね。

玲菜 私が「即答」しないことが、そんなに珍しいわけ？

二人 うん。

珠樹 玲菜さん、もし一緒にやるなら、私が「先輩」ですからね。

玲菜 そうね。「後先」で言えばそうね。だけどね珠樹、世の中は「後先」も大切だ

けど、「どれだけやれるか？」も大事なんだよ。

珠樹 笑顔は私の方が可愛いですよ。

玲菜 あっ・・・普通にムカついた。

珠樹 でも真実ですから。

玲菜 いつそれが真実になったのよ。誰が決めたのよ！

綾女 何、ムキきになって。

玲菜 冷静ですよ。私は。で、いつ？

珠樹 いつ・・・って・・・怖い・・・。ごめんなさい、決まっています。私の  
思い込みです・・・玲菜さんの笑顔の方が素敵かも・・・だから、笑顔で・・・  
ね？

玲菜 ・・・・それも、ムカつく。

珠樹 ええ？

玲菜 綾女、何か飲ませて。

綾女 はい、はい。

玲菜 この前の、あれ以外ね。

頷きながら奥に行く綾女。

玲菜 珠樹。

珠樹 ハイ。

玲菜 綾女とココに住む気はない？

珠樹 ハイ？

玲菜 ここで働くわけだし、どうせなら「住み込み」はどうかなって？

珠樹 綾女が言ったの？

玲菜 私が勝手に言ってるだけ。どう？

珠樹 どうかなあ・・・一緒になってなると、仕事もプライベートもって・・・丸ごと一  
緒になるでしょ？どうかなって思っちゃうな、それは。

玲菜 意外と冷静ね。

珠樹 いつまでも子供じゃないですからね。

玲菜 そう？

珠樹 心配なら、玲菜さんが一緒に暮らせばいいじゃないですか？ どうせ独り身なんだし。

玲菜 ん？

珠樹 ううん、今は別に他意はないですよ。

玲菜 そこじゃない。子供じゃなくなったね。

珠樹 いろいろとありましたからね。

奥から音がする。

綾女 私はどっちもゴメンですよ。

クラスにジュースらしきものを入れて戻ってくる綾女。

グラスの中身を気にしている珠樹。

珠樹 今度は、なんですか？

綾女 「グレープフルーツジュースもどき」

二人 また、もどき！？

綾女 私の「もどき」はそこらのそれとは違うわよ。

珠樹 でも、「もどき」は……

玲菜 「もどき」

綾女 いいから、まずは飲んでみて。さあ、さあ。

それぞれにグラスを渡す綾女。

軽くグラスを合わせ、その「もどき」を飲む3人。その味は、例の「ーヒー」もどき同様になかなからしい。珠樹は一口飲んだのち、残りを一気に飲み干した。3人は飲み終えると、箱や工具箱をそれぞれ片付けに奥へ。

間に浮かび上がる綾女。

綾女 『馬鹿馬鹿しい会話』にどれほどの価値のあるのか・・・私たちは理解していた。まだ終わりを告げる事のない孤独と不安・・・壊れそうな心を、寸前のところで支える事ができる。でも、それもまた完璧なものではない事を理解していた。』

独り、イスに座っている綾女。

綾女

「今日で、アナタが行ってから2年。世界を飲み込んでいた恐怖と不安は終わりを告げたけど、私を飲み込んでいた孤独と不安は・・・ねえ、いつ終わるのかしら・・・『あなたは今どこで、何を・・・』』

綾女月の浮かぶ夜は、隠している心が透けるようで・・・。

テーブル上の籐の箱を開ける。

ワイングラスを二つと、ボトルを取り出す綾女(回想)

綾女

いいのよ。飲みましょう。ワイン一本は所詮、一本分の価値しかないものよ。大丈夫よ。いざとなれば処分するものは他にもあるし、きっとワインはその価値が上がりすぎてかえって使いにくくなるわ。飲みましょう。

ワインをあげる綾女。

綾女

まだあるわよ。あなたが帰ってきたら、またこうこうやって二人で飲むようにもう1本残してある。

ワインを注ぐ綾女。

綾女

なんでアナタなのかしらね・・・。だって、徴兵は始まったばかり・・・この町では、まだ誰もいなかったのに・・・なんでアナタなのかしらね・・・。

ワインを飲む綾女。

綾女

あのさあ、続けるだけの仕入れが出来るかどうかもわからないから、お店閉めてもいい？もちろん、手放しはしないよ。ココで待てる。また二人で始める日を待ってる。この店で待ってる。

ワインを飲む綾女。

綾女

ねえ、アナタにとって一番大切なものは何？ いいじゃない教えてよ。ココでの暮らし？ この戦いに勝つこと？ 「何で」って・・・聞きたいから、アナタの本心を知っておきたいから。格好よく死のうなんて思わないでよ。死んだ

ら、例え何をしても、何を手にしても、そこで終わりなんだからね。「命に代えても守る」なんて考えないですよ。そんな事されて守られても、重すぎるんだからね。だから、帰ってきなさいよ。

最後のワインを注ぎ、グラスをかざす。

綾女

これを飲み終えて、酔ってしまつて・・・眠つてしまつて・・・朝が来る・・・きつと望む形には遠いけど、それでも朝が来る。どんなに逃げても、朝が来る・・・朝が待っている・・・。

ワインを飲みほして、テーブルに上半身を横たえる綾女。

朝、テーブルで寝てしまった綾女。

そこへ玲菜が「塗料」を持ってやってくる。

玲菜

おはよ。手に入ったよ。色はさ、テキトーに・・・。

綾女に気がつき、声を潜める。そして、そつと塗料の缶を床に置く。

テーブルの上に置かれた空のボトルに気がつき、そつと手にする玲菜。

玲菜

・・・馬鹿。

ゆっくりと目覚める綾女。

綾女

玲菜・・・。

玲菜

おはよ。

綾女

おはよう・・・そっか、あのまま寝ちやっただ・・・。今、何時？

玲菜

9時回ったところ。

綾女

そう。

立ち上がって、奥に叫ぶ綾女。

玲菜

綾女、このワインって、この前3人で空けたやつだよね。

奥から・・・。

綾女

ん？そうだけど・・・あつ。

玲菜

やっぱり。

綾女 いいじゃない？ 美味しかったでしょ？

玲菜 そういう問題じゃないでしょ？

綾女 そういう問題よ。

玲菜 違うでしょ！

沈黙。

顔を洗って、タオルを手にした綾女が戻ってくる。

玲菜 アナタは何でいつもそうなの？ 「私は何も問題ありません」って顔して……人の相談ばかりに乗って……弱音吐かないで、笑顔絶やさないで……なんで、いつも……。綾女サービス業向き……。でしょ？

玲菜 真面目に話しているの。

綾女 ……やめてよ、大きな声。まだ、寝起きなんだから。

玲菜 ……。

綾女 玲菜だって私と変わらないじゃない。アナタだって、私たちには何も言わない……。でしょ？

玲菜 私は……。

綾女 「言うことはない」！？

玲菜 ……。

綾女 そんなことを言ったら、私だって同じよ。玲菜や珠樹に言うことがあれば、言ってる。言わないって事は「言うことがない」って事。

玲菜 私とアナタは違う。

綾女 同じよ。

玲菜 ちが……。

綾女 同じなの！ それとも何？ 自分は「自由気ままな独り身」だけど、私は「旦那を兵隊に取られて、さぞ不安でしょうね？ 寂しいでしょうね？ 可愛そうね」って、安い同情してる？ いい人気取りたいの？

玲菜 ちが……。

綾女 いらぬわよ、そんなの。いらぬの。そのワインが何だって言うのよ。確

かに、あの人が帰ってきた時に『二人で』って約束をしたものよ。確かに、3人で飲む為にこの2年取っておいたものじゃない。でも、いいじゃない。取っておいた私が、人で飲むって決めたんだから、それでいいじゃない。いつまでも寝かせておいたって、封を開けるときがこないなら意味がないじゃない。

玲菜 ……知らせが、来たの？

綾女 ……。

玲菜 来たの？

綾女の肩を掴む玲菜。

玲菜 綾女？

その手を振り払う綾女。

綾女 ……わかるのよ。もう「アイツは生きてない」って。出発の朝……うん、令状が届いた日に、理屈じゃなくて感じた。「もう、帰ってこない」って……。

玲菜 ……。

綾女 止めてよ、ありきたりの言葉は……玲菜の口からは聞きたくない。あの人は始めからその覚悟だったのよ。多分、徴兵だって志願したのよ。

玲菜 ……！

綾女 あの頃は、こんなことを考える……気付くこともなかった。疲れていたし、何より終わりの見えない不安に心が壊れた。……言われるまま、聞くままにアイツの言葉を信じていたからね。

闇に浮かび上がる綾女（回想）

綾女 えっ！まだ時間じゃ……だって……大した物は作れないけど、ご飯くらい……だって……。「見送りもいらぬ」って、なんでそんなこと……自分がこれから何処に行くのかわかっているの？仕入れに行くんじゃないんだよ。旅行に行くんじゃないんだよ。戦争に行くのよ。毎日、何百って人が死んでいく戦場に行くんだよ。わかっているの？これが最後になっちゃうかも知れないってことなんだよ。それ、わかって言っているの？

間

綾女 何処に……誰が保障してくれるのよ。「絶対」なんて……「絶対帰ってくる」なんて、こんな世界で誰が信じられるのよ。そんな簡単じゃないんだから「また逢える」なんてそんな簡単じゃないんだらね。

立ち尽くす綾女。それを見ている玲菜。

綾女 アイツよく言ってたの……『また来てもらえる』って思ったら、そのお客さんはもう来てくれない。」って……また来て欲しいなら『もう次はない』って思いで接しないといけない』って……。「次はない』って思ったから「帰ってくる』って言ったのよ。せめて、そう思ってた行ったかったのよ。

玲菜 ……。

綾女 安い正義感で頭の中を一杯にして……自分が立ち上がることで、何を帰られると持ったのかわからないけど……何を守りたかったのかわからないけど……戦って、傷つけあって……何が生まれるかなんて……私には何にもわからないけど、アイツは「言われるまま」に信じたのよ。「愛すること」が「戦うこと」だって……信じたのよ。

壊れたテレビに近づく綾女。

綾女 私からアイツを奪ったのは、弾丸でもミサイルでも地雷でもない。繰り返された「言葉」……「愛」……便利な言葉なんだね。なんだって可能にする。そこそこ美味しい料理を作れるだけの男に「ヒーロー」って夢を見させるんだから。本当に便利……。

間

綾女 玲菜。

玲菜 何？

綾女 私のアイツへの「愛」とアイツを駆り立てた「愛」って同じなのかな？

玲菜 ……。

綾女 同じなのかな？

玲菜 それは……

綾女 同じなのかな！？

玲菜にすぎるように問いかける綾女。

そこへ珠樹が入ってくる。

珠樹 おはよ……。

二人を見つけ、言葉を飲み込む。

綾女の肩を抱え、イスにイスに座らせる玲菜。

玲菜 珠樹。お水、持ってきて。

珠樹 はっ、はい。

お水を持ちに行く珠樹。イスを綾女のそばに持って来て玲菜も座る。

玲菜 彼の愛は、国や社会や……そんなものに向いていたんじゃないよ。絶対に違う。確かに、宣伝に踊らされたのかもしれない。でもそれは、大切に思う人がいるから。その人への愛があるから……だから、彼を駆り立てたそれだって、珠樹のそれと同じじゃないかな。そう思っていないんじゃないかな。私は、一人身だからさ、正直、綾女や珠樹がどんな気持ちで送り出して、どんな思いで待っていて、今に至っているか……そんなのわからない。けどね。「辛い」って言うこと「苦しい」っていうこと「全然、本当は大丈夫なんかじゃない」ってことはわかる。それだけは、わかっちゃう。だって、ずっと一緒にいたからね。姉妹みたいに……一緒にいたじゃない。綾女が大泣きしながら男の子と喧嘩したことも……そして、勝った事も。珠樹が隣の席の男の子に恋をして、二人で色々アドバイスしたり……役に立たなかったけどね……一緒にいたじゃない。だからね、珠樹の時だってそうだったけど、どんなに強がって、隠そうとしても……そうすれば、するほどわかるのよ。

水を持ってくるが、立ち止まる珠樹。

玲菜 でもね、バレバレなのに、アンタは何も言わない。「大丈夫」って顔を作って、大した人間でもないくせに優等生みたいにして……肝心なことは何も言わない。こっちは、待ってるのに……待ちぼうけ。

綾女 !

玲菜 待っていたのはアナタだけじゃない。珠樹だけじゃない。私だって待ってたんだよ。「長女」として……二人の力になりたいって……待ってた。頼ってくるのを……甘えてくるのを……どんなにむちゃくちゃで、どんなに理不尽でも、ぶつけてくれるのを待ってた。

綾女 玲菜……。

玲菜 だって、そういうの本当の姉妹みたいじゃない？ 迷惑だとか……嫌われる

かも・・・だとか、そういうの気にしないって言うか、考えないで「一番弱い部分」をぶつけ合えるって・・・それって「家族」じゃない？

綾女  
・・・。

珠樹  
・・・。

玲菜  
そういうのっていいじゃない。必要じゃない？・・・だからさ、とりあえず。我慢しないで思い切り泣きなさいよ。これ以上ないたら「脱水症状」になっちゃうくらいに、泣きなさいよ。

綾女  
（噴出して）　そういわれて・・・泣けないよね。

玲菜  
そう？

綾女  
そうだよ。

珠樹が戻ってくる。

珠樹  
お待たせ。はい。

玲菜  
何これ？

珠樹  
「オレンジジュースもどき」

玲菜  
また？

綾女  
これ、私の発明！

玲菜  
「発明」ってそういうレベルのものなの、これ。なにで作ったか聞いていい？

視線を合わせて意地悪そうに笑う綾女と珠樹。

珠樹  
ここで一緒に働くなら教えてあげる。

二人をにらみ付けるように見る玲菜。

珠樹  
こわっ！

噴出す玲菜、そして綾女と珠樹。

珠樹  
これから、どんな世の中になるか全然見えないけど、こうしていると楽しいね。

二人  
ん？

珠樹  
「お兄ちゃん」は、いなくなったけど、私には（二人をみて）いるからね。

玲菜 ココで働くもの・・・悪くないか。

珠樹 ほんと？・・・じゃ、乾杯！

と、一人グラスを掲げる珠樹。

玲菜 早っ！

珠樹 玲菜さんの気が変わらないうちに。さあ、二人とも。

綾女 もちろん、歓迎よ。

と、グラスを掲げる綾女。

玲菜・・・先に、原料きいて・・・

二人 駄目。

珠樹 飲んでから。

玲菜 なんで？

珠樹 その方が面白いから。

玲菜 はあ？

珠樹 先輩の言うことは聞きなさい！

玲菜・・・新人いびり・・・

珠樹 それじゃ。新しい朝に・・・

玲菜 新しい朝に・・・

綾女 新しいアシタに・・・

グラスの重なる音が響く。

シルエットで浮かび上がる三人の姿。

不思議そうに飲みものを飲む玲菜。

塗料の缶を持ち、イスを塗る準備をする珠樹

それを見つめる綾女。

綾女 それから二日して、私も元にも珠樹に届いたものと同じものが届いた。そし

て、泣いた。泣いて、泣いて、泣きまわった。そして、泣き終えた私に、玲菜が作った新作の「コーラもどき」を出してくれた。その味は、少し炭酸が弱かったけど・・・ホンモノだった。珠樹があの日言った様に「どんな世の中になるか全然見えないけど」小さなこの場所は確かなもので、私たちの居場所だ。

優しく、静かな光に包まれてゆく3人。